# IT記者会 Report

with The NETWORK NEWS

26／August／2010
Vol.6　No.5

実践的ソフトウェア教育コンソーシアム

## 要求分析重視の設計手法
## 産学協働での推進提唱
### まず「PEXA」と「Xupper」軸に

８月23日(月)午後３時から、東京・神田の専修大学で実践的ソフトウェア教育コンソーシアム（P－SEC、鶴保征城会長）主催による「要求分析を重視した設計手法と設計方法論」説明会が開かれた。猛暑にもかかわらず産学約200人が参加し、講演とパネルディスカッションが行われた。P－SECは国産の業務分析手法「PEXA（ペクサ）」と「Xupper（クロスアッパー）」を軸に、産学協働で推進することにより、情報システムの信頼性と生産性を高めるとともに次世代の人材育成につなげることを提唱した。

## 業務系システムに照準当てる

平年ならそろそろ秋を感じさせる空になっているはずが、当日は猛暑の一日だった。陽射しは強く、じっとしているだけで汗が滴り落ちる。そのような中を、約200人（申込みに対する出席率は97%）が参加、専修大学７号館の１フロアを占有する大教室が満席となったのは、いかにソフトウェアやシステムの品質と生産性に関心が高いかを示している。

参加者の構成は、７割近くが情報サービス関連企業の経営者を含む上位管理職、２割がユーザー企業、１割が大学関係者といったところだ。ＩＴ記者会のメンバーも少なからず参加していた。「P－SECのイベントでこの教室をしばしば利用させてもらっているが、満席になったのは初めて」（P－SEC事務局）という。

### 内容は盛りだくさん

説明会のプログラムは以下のようだった（敬称略）。

１．会長挨拶
　鶴保征城（P－SEC会長）
２．開催主旨説明
　神沼靖子（P－SEC副会長）
３．REXAの概要
　寺町康昌（即業能力開発総合大学校教授）
４．Xupperの概要
　木村智之（ケン・システムコンサルティング(株)）
５．パネルディスカッション

**コーディネーター**
・田口　潤（(株)インプレスビジネスメディア取締役）

**パネラー**
・安光正則（アトリス(株)代表取締役）
・寺町康昌
・木村智之

**Ｐ－ＳＥＣの鶴保征城会長は「今こそシステム開発に工学的手法を」と訴えた**

**Ｐ－ＳＥＣの鶴保征城会長は「今こそシステム開発に工学的手法を」と訴えた**

・佃　均（一般社団法人ＩＴ記者会代表幹事＝筆者）
・神沼靖子

う～ん、これだけ盛りだくさんだと、３時間では短いかな？　というのが第一印象だ。

筆者はかねて（鶴保氏が情報処理推進機構のソフトウェアエンジニアリングセンター所長だったことから）業務系システムへの工学的手法の適用について、同氏とその必要性を話し合ってきた。それで関係者に参加を呼びかけたのだが、今回のセミナーの準備会にお声をかけてもらえなかった。筆者が準備会に参加していたら、もうちょっと違った企画になっていたかもしれない。２週間前ぐらいに鶴保氏から「きみもパネラーとして出てくれないか」と言われて了解したという次第。

### 労働集約からの脱皮

P－SECは産学官による実践的なソフトウェア教育のための教材や教育手法の研究と実施、教育機関と産業界の交流などを目的とする任意団体で、日本情報処理学会前会長の鶴保征城氏が会長を務めている。

鶴保氏はまず、システムの構築における工学的手法の重要性はかねてから指摘されていると前置きし、エンベデッド系と制御系のシステム開発（プログラム作成）には工学的手法の適用が進んでいると指摘した。これに対して、業務系は大きく出遅れているのが実情だ。

（２面に続く）

### 今号の内容


2 実践的ソフトウェア教育コンソーシアム
**要求分析重視の設計手法**
**産学協働での推進提唱**
付：業務系システムの不確定要素
3 4 5 6 7
**旅の余録 in Chaina ①**
**かくしていざ上海へ**
8 〈お知らせ〉
**記者会事務局の移転と**
**新オフィスのご案内**


「勝手気儘編集」とはいえ、筆者の勝手気儘＋私的事情で２か月間にわたって発行しなかったことをお詫びします。

**ICT企業の経営に資する情報の収集と提供、若手記者の育成などＩＴ記者会の活動を支援していただける会員を募集しています。支援費（年会費）は法人６万円、個人１万円、基金拠出は法人１口50万円、個人１口５万円となっています。詳しくは事務局にお問い合わせ下さい。**


【発　行】(株)ネットワークニュース社
【編　集】一般社団法人ＩＴ記者会

【編集オフィス】
東京都港区虎ノ門１－12－12
高宮ビル５階
〒105-0001
TEL 03－3519－6030
FAX 03－3519－6031
URL http://www.itkisyakai.jp
e-mail：y-gaya@itkisyakai.jp

【発行人】竹田義則
【編集人】佃　均

**月２回発行（5日／20日）**

**年間購読料**
**法人会員　¥31,500－**
**個人会員　¥15,750－**
**非会員　¥94,500－**
（消費税送料込み）

**8月25日現在の記者会**
メーリングリストの登録：1,444人
ＩＴ図書館の蔵書：1,283冊


ＩＴ記者会はオープンソース・ソフトウェアのデスクトップ・スィート「Open Office.org」の利用領域を拡大する運動に協賛しています。左のマークはNPO法人オープンソース・ソフトウェア協会（OSSAJ）が2007年10月に作成したもので，電子文書交換用共通ファイル・フォーマットの国際標準規格「ODF」を採用していることを示します。

▼ＩＴ記者会の事務所を９月３日に移転します。現在入居しているビルが来年７月に取り壊されること、毎月20万円超の賃料を支払い続ける意味を考えたこと――が主な理由です。新しい事務所は現在のオフィスからＪＲ新橋駅方向に５分ほど行ったところ。地下鉄・都営三田線の内幸町駅にほど近く、「花半」という居酒屋さんの２階という、飲ンべには最高の立地。ＪＲ新橋駅、地下鉄・営団銀座線の虎ノ門、丸の内線・日比谷線・千代田線の霞が関まで５～６分のほぼ等距離なので、交通アクセスはいまより便利になるかな？▼占有面積は22平米で、現在より４割ほど狭くなりますが、机の数は同じですので、記者会の連絡事務所＋共同オフィスとしての機能は変わりません。古い木造モルタル２階建てのため、床荷重のこともあり、机や複合プリンターを壁際に配置します。結果として中央にちょっとしたスペースができ、ここがコミュニケーションの場になるかもしれません。黄色の円形テーブルも移動します。ただ灰色の大きなラック４本とカウンターは廃棄。戦後生まれとしては「まだ使えるのに……」が本音ですが、やむを得ないでしょう▼そもそも記者会オフィスは記者会に加盟するフリーランスのライターが、個人事務所を個々に開設するより共同オフィス化した方がメリットが大きいという判断で設置したものです。近くまで来たから、と立ち寄るには便利でしたし、お役所の方と打ち合わせをするのにもいい場所でした。ただ実態としては、共同オフィスとして利活用されなかったので、毎月20万円超の賃料にはかねてから疑問を抱いていたのです。これを契機に「じゃあ、月１万円で利用させてよ」という方が出ることに、ほんのわずかですが期待しています▼残念なのは、千三百冊以上の蔵書を擁していた「ＩＴ図書館」が大幅に縮小されることです。白書、台帳、報告書、社史などは新しいオフィスに移動しますが、単行本は倉庫に預けることになりそうです。当面はデータベースで検索していただき、閲覧希望があったとき必要に応じて取り寄せるかたちで運用いたします。また順次、ＰＤＦ化し、ネット上で閲覧が可能な形態に移行することも検討します。

アメリカの例を見ると、1990年代にインドや中国でのオフショア開発が盛んになったとき、工学的手法の研究と導入が一気に進んだ。文化や思想が異なる地域の企業に発注しても、間違いのないシステム（プログラム）ができるようにするにはどうすればいいかと考えた。UML（Unified Modeling Language）はその一つの成果ということができる。

対して日本では、多くの企業が実務への不適合や技術習得の困難性などを理由に採用に踏み切っていない。このため要求仕様の不完全性が手戻りを生み、検収時のチェック漏れや運用保守でのトラブルの遠因となっているケースが少なくない。人月単価方式に甘んじている間に、国内ＩＴ産業の利益率は極端に悪化している。

2008年秋に表面化した景気後退を契機にユーザー企業は効率的なＩＴ化投資を重視するようになっており、国内の情報システム会社はこれまでのような労働集約型システム開発では事業が成り立たない局面に立たされている。「生産性を高めるには、システム構築の上流工程、すなわち要求定義と仕様策定の段階であいまい性を除去し、論理的矛盾を排除する必要がある」と鶴保氏は言う。

## 神沼氏が開催主旨を解説

講演に先立って、情報処理学会フェローでP－SEC副会長の神沼靖子氏が説明会の開催主旨を解説した。

神沼靖子氏

今回取り上げるのは、(株)アトリスの「PEXA」（ペクサ）とケン・システムコンサルティング(株)の「Xupper」（クロスアッパー）の２つだが、２社から協力が得られたというのが理由であって、この２つに限定してはいない。ただP－SECとしては、日本の文化に馴染み、海外に発信できる新たな方法論が必要だと考えている、ということだった。

また今回の説明会をキックオフとして、大学に「要求分析講座」を開設していくこと、方法論を利活用する手法を探求すること、そのためにはシステムとソフトウェアの位置関係と関連する用語の再定義、さらにその外側（前提）にある組織や人、社会の構造などについても、並行して勉強会を開いていきたいと語った。

## 主催者も未消化だった？

このあと「PEXA」と「Xupper」の概要説明があった。割り当てられたのはそれぞれ20分と短い時間だったこともあって、参加者の大半が「よく分からない」という未消化の状態。パネルディスカッションの冒頭、コーディネーターの田口氏の「よく分かった、という人はどれくらいいますか？」という問いかけに挙手をしたのはほんの数人、「何となく」がほぼ６割、「よく分からない」が残り４割。

主催者としては、今回はイントロダクションなので、詳細な説明は次回以後、今回はシステム設計方法論の重要性を理解してもらえればいい、と考えたのだろうが、できればそれぞれに１時間を割当て、質疑応答の時間を十分に取る設定があってよかっただろう。このあたりについて、記者会は企画段階から参加していないので――鶴保氏とセミナーの必要性を話してはいただけに――、ちょっと残念だった。

一方、概要説明に立った講師には、短時間でより明確にメッセージを伝えるプレゼンテーション力が求められる。方法論の具体的な内容に入ると、技術論になってしまう。講演者が技術者的な立ち位置なのでやむを得ないのかもしれないが、説明会の主旨と参加者の関心を考慮すれば、要求分析・定義の上位概念を再確認する作業が必要だったのではないか。

つまり、何のために情報システムを構築するのか、現状の課題と情報システムの目的をより明確にするために、現状分析（ＡＳ－ＩＳ）と解決策（ＴＯ－ＢＥ）が設定されるのだ、ということだ。また、ＳＡ－ＩＳ／ＴＯ－ＢＥの設定において重要なのは、事業体の社会的な役割、組織の機能、従事する人の立ち位置、社会とのかかわりといった課題を解明することでもある。これまでシステム設計の方法論は、事業体の社会的な役割や組織、人の問題をどこかに措いて論じられてきた。しかし21世紀型情報システムは、そこを避けて通ることができないのだ、という視点がほしかった。

それが無理であったとしても、せめて「何がどのように変わるのか」「どのような効果があるか」に焦点を絞って展開すべきではなかったか。その意味で主催者も消化不良で、論点整理が不十分だったのかもしれない。

## 業務系システムの不確定要素

ここで23日のセミナーから離れて、業務系システムへの工学的手法の適用がどこまで可能か、という問題を考えてみたい。それは、エンベデッド系・制御系システムと業務系システムの違いということでもある。

まず気がつくのは、エンベデッド系・制御系システムは、扱う対象が機械ないし工学的に組み立てられたロジックであるのに対し、業務系システムは人間がからむ、という点だ。対象が機械ないし工学的に組み立てられたロジックであれば、ロジックが通用する。ところが人間は予測不能（ないし困難）な要素を多分に持っているので、ロジック通りにいかない。業務を遂行する組織が人によって構成されているためだ。

業務手続きやデータ（伝票）の流れは図式できるので、工学的手法を適用できる。けれども、人間系は工学的手法と馴染み難い側面を持っている。販売管理システムや売上管理システムは一見すると扱う対象がモノであったりカネであったりするが、モノやカネを扱っているのは人間なのである。

人間が関与するため、100人いれば100通りの解釈や対応があるわけだ。パネルディスカッションで「要求要件が1000を超えるケースもあって、そうなるとプロジェクトは制御不全に陥りやすい」という指摘があった。だから難しい、だから工学的手法が通用しないというのは、いかにも性急な結論である。なぜ1000を超えるような要求要件が生まれるかというば、業務手続き（方程式）と人間系の処理（非方程式）が混在し、同じ土俵の上で議論されるからである。

例として出た病院の管理システム。たしかに新しい薬品や治療法が出ると業務フローが変更されるし、患者の状況によって対応が変わる。そこに医師の属人的な要素が加わるので、その組合わせは数億、数十億に達する。最適解は出てこない――ように見えるのだが、そこから人間系の処理や手続きを区分けして、別枠に置くことが可能であれば、システム設計は複雑度をかなり軽減できるはずである。それを工学的手法で解析することは可能ではないか。

また、人間系の予測不能な行動についても、一部については統計的な予測は可能である。例えば営業マンが受注情報をいつ、どのタイミングでシステムにインプットするかということだ。規則があれば規則を守らないヤツが必ずいるので、システムはそれへの対応にも備えなければならない。その結果、業務系システムは、結果として例外処理のかたまりになるのだが、例外のパターン化はある程度可能なのだ。筆者は別のところで、「サービスの生産性を数値化する」という所論を書いたことがあるが、業務系システムにおける人間系の予測不能な行為というのは、それと非常によく似ている。

## 取引や市場の環境

もう一つ業務系システムに特徴的なのは、当該事業体の事情に完結しない、ということである。市場の動き、取引先との関係、組織の機能（機能としての組織か、組織としての機能か）、従業員の意識などが重層的に交錯する。この部分は、23日にテーマとなった領域ではないけれども、それを抜きにして工学的手法を語ることはできない。産業構造や取引構造、雇用問題など社会システム全体を把握したうえで、システムに対する要求が見えてくる。

だがＩＴ技術者にそこまで求めるのは、本末転倒である。それは経営層もしくは政治家の仕事である。どのような方向性を示すのか、企業の社会的な使命、位置づけは何か（何のために当該事業者は存在するのか）、社会にどのような利益をもたらす存在なのか等々を具現するのが経営者というものだ。それをサポートするエンジニアが、旧来の「エンジニア」の枠組みのほかに必要になっている（はずである）。

事前申込みなしの参加者が多く、予め用意した席が足りなくなった。「満員御礼」といったところ。

パネルディスカッション。５人の意見を取りまとめるのに田口氏＝写真いちばん左＝は苦労したことだろう。

## 文法が理解できれば表現できるのか

人に物事を伝えるには「表現」が訓練されていなければならない。表現力を伴わないシステム方法論は机上の空論である。UMLはその一つの解決策だが、重要なのは自然言語であって、自然言語でコミュニケーションができないのに図形でなら可能というのは、必要最低限の情報伝達で十分だ、という低レベルな発想である。だからシステム要件がいつまでも固まらないのだ。表現手法＋表現力（語彙、接続詞、一文の長さ、表記：箇条書きか文章か）が重要なはずだが、常にこの問題は軽視されている。

## 自律・自立型システムを目指して

個人の自律的・自立的な行動を促すシステムでなければ、これからの情報システムとはいえない。業務手続に従うだけの、あるいは事後処理的な情報システムは、すでに存在する。クラウド時代の情報システムは、社会の構成要素としてのシステムでなければならず、それを生かすのは実務に従事する現場の個人である。

ここでいう「個人」についてもまた様ざまな議論があるとは思うけれど、とりあえずそれはおくとして、要するに現場を無視したシステムは成立しないということだ。ダイセル化学の事例を出したのは、そういう意図があってのことだった。

化学プラントにおけるパイプの振動や熱から異常を感知するのはセンサーではない。今夏のように猛暑であれば、金属パイプはおのずから熱を持つ。センサーは誤差の許容範囲でしか判断しないので、異常値を次々に報告してくるだろう。カメラのレンズの歪みを検出するのは、人の指先や目であって、機械ではない。機械は数値的な正確さを保証するかもしれないが、人間の感覚を満足させることはない。

以上の課題を従来のシステム工学の方法論で解けるか、というと無理がある。人間の行動学、心理や欲求といった非ＩＴ的、非方程式要素を解析するには、組織や人を分析しなければならないということだ。

# 旅の余録 in China

「一週間のご無沙汰でした」は玉置宏さん（1934～2010）の名科白だ。記者会 Report は一週間どころか２か月間のご無沙汰になる。さすがにそろそろ発行しないと、記者会は潰れちゃったの？　ということになりかねない。ま、月刊誌『ＩＴ Leaders』（インプレスビジネスメディア社）を講読している人は、連載《21世紀型情報システム像を探る》で筆者の名前を見て、「どうやら息はしているらしい」と想像してくれているだろうけれど。この間、筆者にとって大きなイベントがあった。７月21日から28日まで、中国を視察してきたことだ。いや、視察しただけではない。現地のソフト会社経営者や大学関係者、市政府担当者と意見交換をし、あげくは、わずかな時間だがレクチャーをやってしまった。デビュー戦で初得点の〝快挙〟――かどうかは別として、見たまま・聞いたまま・感じたままの中国をレポートする（いつものことながら、写真はすべて佃）。

往路の機内で出た昼食。かやくご飯のおにぎりに京風のおかずが九品。容器の模様も日本風だ。

虹橋空港。はるか向こうに建築中の新ターミナルビルが見えた。

## §１　かくしていざ上海へ

### ■ＳＥＡからのお誘い

岸田孝一氏

今年６月、横浜市で「ソフトウェア・シンポジウム2010」が開かれた。主催はソフトウェア技術者協会（ＳＥＡ）で、1985年の同協会発足以来、つかず離れずの関係にある。国内ソフトウェア業の状況を嘆きソフトウェア技術者の自立を訴求する点では共感できる部分が少なくないのは事実だが、戦いの場も戦い方も違う。となれば、おのずから視点が異なる。

《国内ソフトウェア業の現状と将来展望》をテーマに１時間の講演を終えた後懇親会で

――どう、上海でやるワークショップに来てみない？

と声をかけられた。

声をかけてきたのはＳＥＡの活動の精神的な支柱である岸田孝一氏である。同氏が日本に初めてＵＮＩＸを商用利用に適用して以来だから、なんだかんだといっている間に30年のお付き合いになる。

――現地の手配は杉田クンがやってくれるから、往復のチケットだけ自分で買えばいい。

という。

上海市でソフト会社（福善信息技術有限公司）を経営する杉田義明氏のことだ。同氏とも25年を越えるお付き合いになる。岸田氏から見れば誰だって「クン」かもしれないが、杉田氏は筆者より数年の年長、数少ない正真正銘のシステムエンジニアの一人である。

中国でのワークショップは以前から何度もお誘いを受けていた。これまで年に一度か二度、米国や韓国を中心に海外を視察してきた。中国に行く機会がなかったわけではない。瀋陽から東に進んで臨江まで行く。うまく行ったら北朝鮮に足を伸ばす、という計画もあった。ところがいくつかの事情が重なって、いまだに達成できていない。

それとここ数年、国内ソフト産業の閉塞感がある。記者会 Report を２か月も休んでいたのは、そういう状況を前にして決まりきった発想しかできなくなっている自分に辟易していたためでもある。思い切って飛び出してみるか……。

そのときは頭の片隅にもなかったのだが、あとで気がついた。あっ、上海は万博の真最中じゃないか。反射的に思ったのは「じゃ、行ってみよう」ではなく、「混んでるだろうな」だった。飛行機代はおのずと割高、それに学生たちが夏休みに入っている。ひょっとするとチケットは取れないかもしれない。

そう思いつつ、日ごろお付き合いがある旅行代理店に電話をすると、

――ＪＡＬですが、羽田―ホンチャオの往復便が空いてます。いまなら取れますよ。

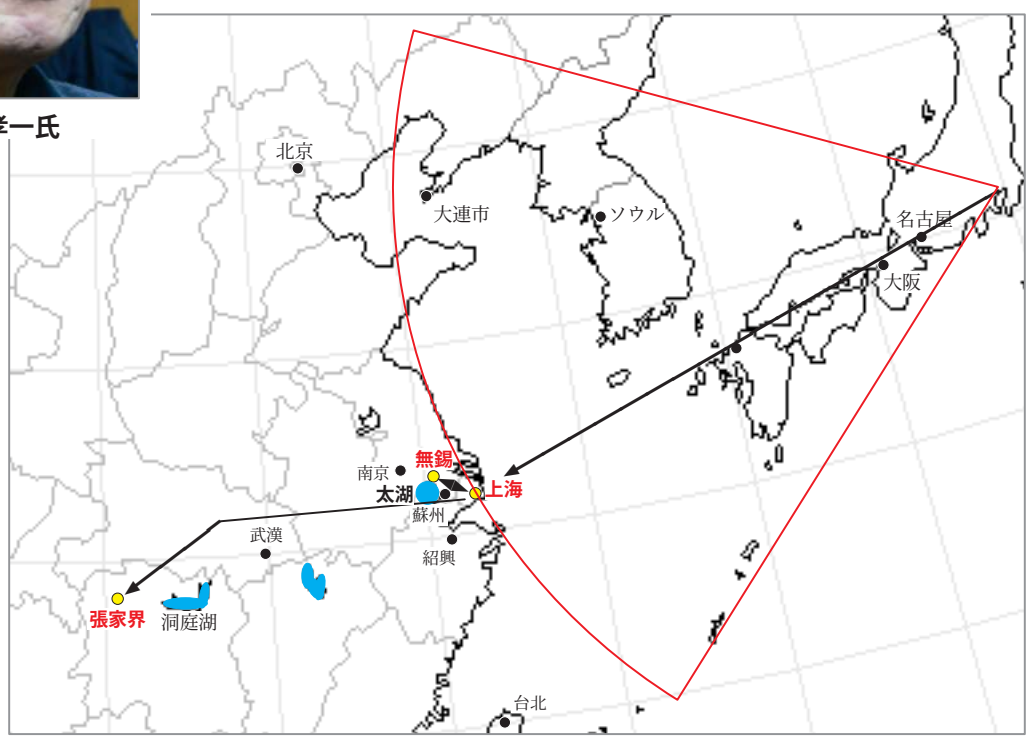
という返事がきた。チケットが取れたら行くつもりでいた。それで即座に

――じゃ、それでお願いします。

という言葉が出た。

**ＳＥＡ上海ソフトウェア・フォーラムの行程**

| 日（曜） | アクション | 会　場 |
|---|---|---|
| 21・(水) | 羽田→上海・虹橋：現地（上海）集合 | |
| 22・(木) | 【終日】上海Forum | 上海市科学会堂 |
| | 【夜】レセプション | 市内レストラン |
| 23・(金) | 【午前】上海→無錫 | 中国高速鉄道・バス |
| | 【午後】無錫ＷＳ① | 無錫市Ｏ－PARK |
| | 【夜】レセプション | 市内レストラン |
| 24・(土) | 【終日】無錫ＷＳ② | 無錫市Ｏ－PARK |
| 25・(日) | 無錫→上海→張家界 | 中国高速鉄道･飛行機 |
| 26・(月) | 【終日】張家界ＷＳ | 国際張家界大酒店 |
| 27・(火) | 張家界→上海 | 飛行機 |
| 28・(水) | 現地（上海）解散：上海・虹橋→羽田 | |




### ■ホンチャオってどこじゃ？

気心が知れている人が何人か同行するとはいえ、今回のＳＥＡ中国ソフトウェア・ワークショップのテーマも詳細なスケジュールも分からない。上海―無錫―張家界の３か所でカンファレンスとワークショップを行うらしい。ともあれ「参加します」のメールを送った。すると事務局（杉田氏）から、参加する人は上海や無錫について抱いているイメージを述べよ、ポジションペーパーを書いて送って来い、何か提供できる話題はあるか等々の注文が矢継ぎ早に送られてくる。

上海で宿泊するホテルの予約票もＰＤＦで届いたが、さて、ホンチャオに着いたらどうすりゃいいんだ？　どこにどうやって行けばいいの？　中国語はできないし、英語だってろくに使えない。通じるかどうかも分からない。それより「ホンチャオ」ってどこなの？

出発を一週間後に控えたころ、杉田氏から「空港の到着ロビーでお会いしましょう」というメールが届いた。これでとりあえずは一安心だが、「ホンチャオ」な依然として謎のままだ。上海にほど近い空港の名前であるには違いなかろうが……。出発の前日（７月20日）の午後５時過ぎまで、セミナーの打ち合わせ、取材、来客が立て込み、インターネットの地図で調べることができたのは夜の９時過ぎだった。それで、上海市に昔からある空港で、現在は国内線用に使われていることがやっと分かった。

「虹橋」と書く。

虹の橋。いい名前じゃないか。

旅行代理店が持ってきてくれた旅程表では、午前９時20分に羽田を出て、虹橋に11時30分に着く。時差が１

時間あるので、実質の飛行時間は約３時間だ。台北よりよほど近い。インターネットの地図で調べると、なるほど直線距離にすると東京―福岡間のほぼ倍、緯度でいうと鹿児島県大隅半島の突端・佐多岬とあまり変わらない。

５世紀の〈倭の五王〉、７世紀から９世紀にかけて計15回にわたって往来した遣唐使船の多くは、難波津―瀬戸内海―那ノ津（博多）―五島列島―東シナ海―寧波たどった。その古代ルートの上をひとっ飛びするわけだ。実際、羽田を離陸して小一時間すると、目の前のモニターに瀬戸内海の島々や新居浜あたりの地形が映り始めた。

お昼の機内食が純日本風だったのは、さすがにＪＡＬというべきか、単に日本の航空会社だからなのかは分からないが、見た目もきれいだし、京風の味付けでなかなか美味しかった。このところ機内食が出る長距離の空路を利用したことがなかったこともあって、妙なところに感動した。食後のドリンクサービスを受けたところで虹橋空港に着陸。本当にあっという間だ。

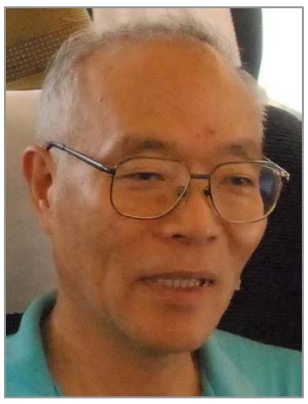
外国便の到着客用通路から空港を見ると、全体が土気ている。遠くに、建設中の新しいターミナルビルがかすんでいる。土ぼこりというより、空気そのものが土色に見えるのは、そのせいに違いない。十数年前のソウル・金浦空港を思い出した。空港を出たとたんに、鼻にツンとくる匂いがし、目がチカチカ痛くなったものだった。自動車の排気ガスが光化学スモッグを発生させていたのだが、数年後には嘘のように空気がきれいになった。日本だって1960年代はそうだった、韓国も中国も同じ道をたどっているのだ――などと考えながら歩いて行く。

ただ虹橋空港が成田や仁川と決定的に違うのは、様ざまな交通アクセスが計画的に整備されていることだ。新ターミナルは一部運用の段階だが、すでに地下から中国高速鉄道（日本でいう新幹線）が発着していて、無錫市まで35分、南京市まで１時間半で行ける。もちろん上海市内に延びる地下鉄もある。高速道路もつながっている。現在のターミナルは羽田より小さいが、中国の経済発展に伴って、近い将来、ここはアジアのハブ空港の一つになるに違いない。

## §２　上海の街角で

### ■日常生活は１日100元あれば

空港のロビーで待っていてくれた杉田氏と無事合流したものの、当方は何の準備もせずにやって来たようなものだから、元を一銭も（変な表現だが）持っていない。「大丈夫。ホテルに着いてから元に変えればいい。手数料が安いから」と杉田氏がいう。空港から市内までのタクシーの中でお互いの携帯電話の番号をやり取りしている間に市街に入った。窓の外の風景がすべてもの珍しく思え、すっかり〝お上りさん〟になっている。


杉田義明氏

高層のオフィスビルやマンションがニョキニョキと建っている。工事現場もあれば、いかにもできたばかりのビルもある。その中に旧市街の低層屋根がひしめき、ヨーロッパ風の古い建物――多くはかつての米欧列強の租借地の面影――が混在する。「あれは何？」「これは何？」の質問に杉田氏はさぞ閉口したことだろう。

ホテルは繁華街にほど近い上海中福大酒店。外国人旅行者――インド、イラン、韓国、アメリカ、ドイツ、日本など。全身黒づくめで目だけを出した民族衣装ブルカを着たアフガニスタンの女性は特に目だった――が多く宿泊する４つ星のホテルだ。ロビーは広くてとても立派だった。従業員の接客もきちんとしている。上海万博のために特訓を重ねたのだろうか。ただ、カタコトとはいえ、当方の英語が全く通じなかったのは意外だった。

ここで初めて円を元に換えた。１万円が733元なので、１元＝約14円ということになる。平均的なお昼代が８元から10元（100～140円）、夕食にちょっと張り込むと１人60元（850円）が相場だそうだ。アルコール56度という強烈な焼酎「白酒」（バイチュウ）のポケット瓶や青島ビールの瓶入りがが４元から８元（瓶入りは瓶を再利用するのでその分だけ安い）、コンビニエンスストアで買ったペットボトルのお茶が４元から５元。「上海万博のせいでタクシーが２割も値上がりした」そうだが、それでも初乗りが15元（だったかな？）。１日100元あれば日常生活は十分ということのようだった。

### ■まさに新旧が猥雑に混在

到着した日はワークショップの前日で、夕方、ホテルのロビーに集合し、歩いて10分ほどのところにある京劇の常設劇場で観劇する予定だった。それまで時間があったので、地元のソフト会社を取材したあと、町を散策することにした。ソフト会社の話はあとに回すとして、町の様子を。

いや、とにかく暑い。帽子を持ってこなかったのが後悔されるほど陽射しが強く、汗がみるみるうちに噴き出す。高校生のときだから40年以上前、夏休みを利用して京都を歩き回ったことがあった。腕に汗の粒が噴き出したのはそのとき以来だ。持っていたタオル地のハンカチはたちまちグッショリになってしまった。

正式な名前は忘れてしまったが、いつも歩行者天国になっている大きなショッピング街があった。デパートや若い女性向けのブティック、コスメティックサロンなどが建ち並び、ちょっとした観光地になっている。日本でいうと原宿、渋谷といった感じだろうか。

――帽子、帽子……。

と探しながら歩いているうち、裏道に入り込んだ。するとどうだろう。悪く言えばゴチャゴチャ、雑然とした小さな間口の商店が並び、道路の上に洗濯物が靡いている。そういう所に迷い込む日本人旅行者は少ないのか、あるいは日本製一眼デジカメが珍しい（ということはあるまいが）のか、街中の人の視線を感じつつ、歩く。

にしても、とにかく暑い。

店の前ではランニングシャツにステテコ（中国では何と呼んでいるのだろう）のおっちゃんたちが屯（たむろ）し、荷物を満載したオートバイ、スクーター、自転車、リヤカー

**新旧が入り交ざる上海市街**

▶空港からホテルに向かうタクシーの車窓から初めて見えた洋風建築は旧ロシア教会という。

裏道に入ると昔ながらの雑然とした商店街が続く。自転車、リヤカー、オートバイ、スクーターが市民の足だ。

上海駅前。これだけ見ると日本の地方都市に来ているような錯覚がある。

幅30m以上はある歩行者専用路。三両編成の小さな観光用の路面電車（？）が走っていた。

上海中福大酒店のフロントロビー。全体が黄金を思わせる色調で統一されていて、なかなか立派だった。

歩行者天国に隣接した野外公会堂。照明装置や音響設備などが充実しているようだった。

▶近代的なデパートの脇に、天秤棒を担いで野菜や果物を行商している人もいた。

が無秩序に、しかし衝突もせず巧みに走りぬける。角々には露天が店開きし、たぶん違法コピーに違いない映画やアニメのDVDが売られている。天秤棒を担いだ野菜（茄子やかぼちゃ）の行商人が行き交う。人々の話し声が大きい。そこにバイクのエンジン音、遠くからの車の音がかぶさってくる。

いやはや騒々しい。

見上げればガラス張りの高層ビル、その足元に、あたかも昭和30年代の日本と同じような景色が広がっている。猥雑で騒々しいのだが、人々は逞しい。何でもアリの世界の一角を垣間見た。そのエネルギーが熱波となって押し寄せてくる。

上海市の総人口は1,800万人、そのうち約1,000万人が市街区域に集中している。総面積は6,340㎢で、日本の群馬県や宮崎県とほぼ等しい。なまじ「市」の文字が付いているので、われわれは英語でいうところの〈City〉と錯覚してしまうのだが、中国でいう「市」は日本の県と同じ規模で、かつ中央政府からの独立性が高い。年間の市内総生産額１兆3,700億元（約19兆円）は北海道、福岡県の域内生産額とほぼ等しく、住民１人当りに換算した７万3,100元（約102万円）は都市単独で世界25位にランクされる。さらにいえば政治都市・北京と肩を並べる経済の中心都市だ。

急速な発展を見せたのはこの10年だ。万博（現地では「上海世博」）が開かれるまで、この町の道路にはゴミがいたるところに捨てられていたそうだ。ところが、市当局の徹底した清掃活動――箒とチリ取りを持った大勢の清掃員が町中にいてゴミを片付け、歩道のあちこちにゴミ箱が設置されている――と市民への啓蒙で、ゴミは姿を消した。急速な発展ゆえに、新旧が入り交ざった猥雑な景色をかもし出しているのは事実だが、この勢いはちょっとやそっとでは止まりそうにない。

## ■初めての買い物

大通りに面した一画に上海EXPO記念グッズの特設店があった。中学の夏休み、林間学校で霧が峰に行ったとき、途中のドライブインで最初のキーホルダーを買って以来かれこれ45年、これまでに集めた数は400を超えた。安くて小さくて、旅行の記念になる。EXPOは期間限定だから、買わずばなるまい。言葉が通じないまま、中国で初めての買い物だ。

店の中は大混雑だ。中国では「店の言い値で買うのは外国人。まず言い値の３分の１から交渉」が通常だそうだが、さすがに上海市の直営店とあって値段の交渉をしている人は皆無だった。EXPO会場に行けない人が買いに来ているのかと思ったら、どうやら地方からやってきた人がEXPO見物のあと、大量のお土産を購入できるように、市が配慮したらしい。

▲上海EXPO記念グッズの販売所／▼購入したキーホルダーは上海世博の中国館を象ったもの。

商品を指さして、店員に「これがほしい」と伝える。すると商品名と値段を記入した伝票を渡しながら、あらぬ方向を指で示して何かを言っている。

――何のことだろう。

と考えて、分かった。

代金の支払い所でお金を渡した証明書（領収書）をもらう。その証明書をもって売り場に戻る。店員はそれを確認してから商品を渡す、という仕組みなのだ。店内がごった返していたのはそのせいでもあったわけだ。

購入したキーホルダーは、単品としてはそこそこの値段（35元＝490円だが、１食10元の中国では決して安いとはいえない）のためか、ちゃんとした箱に入っている。ところがそれ以上の包装はしない。レジ袋のようなものもくれない。商品そのものを手渡して終わり。過剰包装とレジ袋に慣らされている日本人にとって、なんとも呆気ないのだが、質実剛健、省資源とはこういうことを言うのだろう。

## ■正確な通貨単位は「圓」

買い物をしたところで、中国の通貨の話を。

中国の通貨単位が「元」であることは、誰でも知っている。ところが、紙幣をよく見てほしい。「元」ではなく「圓」の簡略字が書かれている。裏面のアルファベットは「YUAN」だ。

昔、貨幣は円い硬貨だった。それで紙幣に表示されているのは「圓」、それを「元」に言い換えているというわけだ。つまるところ日本の「円」の由来である。中国の通貨がいずれ切り上げられ、国際為替の機軸の一つになったとき、「圓」と「円」の関係はどうなるのだろう――などということを考えた。

ともあれ、「元」である。

じゃ、その下は？　となると、実は筆者は全く知らなかった。日本では「円」の下に「銭」という単位がある。あるにははあるが、あくまでも計算上のことで、実際に紙幣やコインが流通しているわけではない。ところが中国では「元」の下の「角」、その下の「分」が、紙幣やコインで流通しているのだ。

右の写真は旅行中にＷＳに参加した方々の協力を得て集めた中国の紙幣とコインだ（紙幣は偽造防止のため、赤い斜線を付けた）。「元」紙幣の肖像は、若かりしころの毛沢東氏、裏面には中国各地の名所旧跡が描かれている。筆者の画像取り込みのテクニックのせいで厳密ではないが、100元札から順に、額面に応じて小さくなっていく。１角にいたっては、子ども銀行券のような感じすらある。

ただ図柄は角紙幣のほうが面白い。５角は紡績工場が描かれ、２角、１角には人民が描かれている。文化的な偉人や国の指導者、国王などを描くのが一般的だが、いかにも人民の国、かつ他民族国家らしさが現れている。色合いも角紙幣のほうがいいように感じたが、何でもアリの国ゆえに偽造があとを絶たないのだそうだ。

## ■紙幣の印刷・流通費のほうが高い

町中で流通しているのは１元紙幣が最小単位だ。５角以下の紙幣は印刷と流通の経費のほうが高くつくので、中国人民銀行は新たな発行をしていないそうだ。上海のような発展目覚しい大都会ではインフレが進んでいて、旅行者の目で見ると、そろそろ最高額面の見直しが必要な段階に入ったように映る。旅行者はどうしてもホテルのレストランや瀟洒なショッピングセンターで食事をしたり買い物をするので、10元単位で減っていくし、ちょっとまとめ買いをすると100元、200元がパッパと消えていく。

ところが、最初こそ100元＝1,400円と換算して「安いじゃん」と思うのだが、そのうち慣れてくると、１元が100円のような感覚になってくる。値切るのが当り前、店の言い値で買うなんて馬鹿馬鹿しい、と思うようにな

ってくると、100元はなかなかに使いでがあるものだ。

実際、筆者は25日の日曜日に行った太湖のほとり（中国中央電波局がドラマ『三国志』のロケ用に建設したテーマパーク、映画『レッドクリフ』のロケにも使われた）で中折れのストローハットを購入したのだが、店主が「25元」と言ったとき、思わず「高い！」と口に出していた。

25元×14円＝350円だから、言い値で買ってあげればいいようなもの――同行した大学教授が言うように、「お店の言い値で買ってあげれば、われわれも中国経済の発展に少しでも貢献できるわけだから」――なのだけれど、結局、15元で手に入れた。この中折れ帽は旅行中、大いに役立った。

最後にコインのことを。

コインは補助通貨なので、国外では交換できない。アメリカに行くと財布やポケットに25セントコインがジャラジャラたまって処理に困ることがあるのだが、中国ではそのような心配はまず不要なようだ。１元コインがメインで、たまにお釣りで５角コインが返ってくることがある程度だ。現地のお店は基本的に１元未満は四捨五

入するので、損をすることもあれば得をすることもある。右の写真は１元、５角、５分、２分のコイン（大きさを比較するために日本の500円コインを置いてみた）だが、市中ではなかなか手に入らない――ということで、小額コインは岸田氏からいただいた。

## §３　上海Forum（7／22）

### ■上海市科学会堂

さて、ＳＥＡ中国ワークショップ（WS）である。これまで余談が長すぎた。というより、筆者にとっては余談の方が面白いのだが、何のために行ったのか、仮に大義名分であったにせよ、ワークショップで出た話題に触れないわけにはいかないだろう。

会場となった上海科学会堂は旧フランス租界の閑静な高級住宅地の中にあった。左右の街路樹が道路全体に陰を作り、木漏れ日が美しい。かつて上海市の商工会議所だった建物の内部は黒光りする木の柱と廊下、入り口のホールを抜けると芝生の庭が広がっていた。２階に上がるとアールデコ調のステンドグラスから柔らかい外光が差し込んでいる。

ＷＳの休憩時間に、放置されたままに見えた階段を上って行った。隅々にほこりが溜まり、ガラスの破片も落ちている。空気が淀んでいたが、よもや事件に巻き込まれることはあるまいと行けるところまで上って行くと、会堂を屋根の上から見下ろせる管理棟に出た。割れたガラスからのぞくと、会堂の周りは二階建ての住宅地、向こうには高層ビル群が見える。これも上海の新旧混在の景色だった。

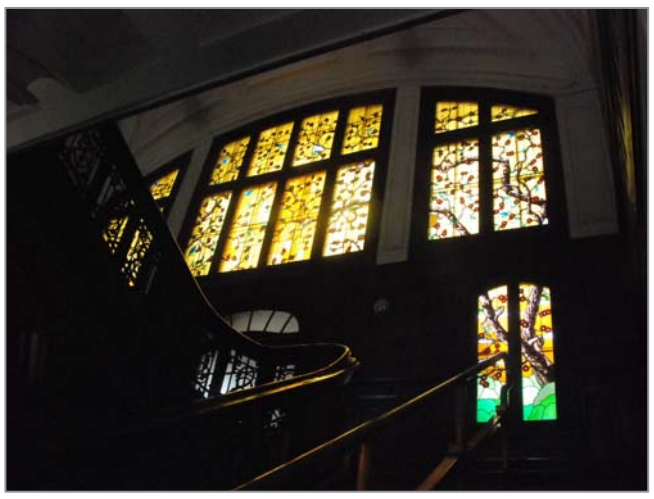
中国の他の地域や都市ではどうか――なにせ中国は初めてなので分からないが――少なくとも上海は第二次大戦前ないし中国共産党政権樹立以前の建物を、重要な資産として利活用しようとしている。日本のように土地が狭いということがないせいもあるだろう（としたら、なんであんなに高層ビルが建ち並ぶのだろう、という疑問はあるが）、旧外国人租界に残る歴史的建造物を補修し、ただ観光用に保全するだけではない。民間事業者に貸与しているのだ。

旧三菱財閥の上海本部ビルは高級ナイトクラブに、周辺の洋風建築はブティックやレストラン、一般の事務オフィスという具合だ。旧フランス租界の商工会議所を科学会堂とし、今回のような会議場として提供するのも、その一環といっていい。こういうところを見ると、大陸的というか奥の深さを感じてしまう。

フォーラムの会場となった上海科学会堂は旧フランス居留地にある。現在は閑静な高級住宅地。

休憩時間に階段を上っていったら本館の屋根を見下ろす管理棟に出た。高層ビルとの対比が印象的だ。

道路側から見た上海科学会堂。かつて上海商工会議所だった建物には歴史の重みが感じられる。


黒光りする階段手すりのカーブと、梅をあしらったステンドグラスが美しい。

### ■中国でオープンコミュニティは可能か

今回のＳＥＡ上海Forumの正式名称は「ＳＥＡ上海Expo Sotware Forum」である。主催はＳＥＡの上海支部、日本のＳＥＡは共催の立場で、上海世博協賛イベントの位置づけだ。テーマは〈無形労働価値〉である。事前に上海市当局に届出を行い、認可を受けなければならない。市当局の認可が得られれば公的なイベントとなり、公共施設を利用することができる。参加者には予め「会議参加証」が発行され、当局から提示を求められることがある。

これは当日の話題になったことだが、そのような管理下で「中国でソフトウェア技術者のコミュニティは可能か」という課題がある

会議参加証

会議名称　「無形労働価値」
SEA 上海 Expo Software Forum

会場　上海市科学会堂　1113 室
住所　上海市南昌路 47 号
日時　２０１０年７月２２日　上午
予約者　福源(上海)信息技術有限公司

参加者氏名　＿＿＿＿＿＿＿＿

基本的に不特定多数の任意の集会は禁じられているので、自由な意見交換は難しい。ソフトウェア技術者がインターネット上にコミュニティを作って、よってたかってソフトウェアやコンテンツを開発・作成するようなオープンソース型コミュニティなどはモッテノホカということになる。

オープンソース型コミュニティについて、上海在住者から興味深いコメントがあった。

――建前上ですが、この国ではすべての組織は政府の管理下にある。自分たちも技術者の会合を持とうと考えて市政府に申請をしたが、市の担当者から「それならこういう組織があるから、その下の分科会になりなさい」という指導を受けた。また、活動の内容を頻繁に報告することが義務付けられている。代表者はそのためにいるようなもの。セミナーや勉強会は既存の公認された組織や大学、企業が主催者になれば、問題なく実施できる。このフォーラムも上海に本社を置いている会社が申請したから、何の問題もなかった。

一見すると自由がないように見えるが、ある意味では非常に透明性が高いともいえる。国や市の議会や委員会はすべて公開でテレビで中継されているし、企業の経営情報は人民に公開されている。いちど公認されれば、法に触れたり当局に反社会的な活動と判断されない限り自由に振舞うことができる。インターネット上のコミュニティはたしかに難しいところがあるが、規制を逃れる工夫が次々に出てくるし、サーバーを海外に設置することで対応するケースも出ている。

上海Forumには日本から 12 名、現地から８人の参加があった。会場は上海科学会堂の講堂で、マイクを使わなくてもよく声が通る（でも念のために使った）。

### ■著作権の保護と検閲

コーディネーターの熊谷章氏（タオベアーズ代表）から、「中国では知的労働の成果物について、何か話題を提供せよ」とのことだったので、筆者は次のような話をした。

――われわれの仕事は、取材をして記事を書くことが

第一、それを新聞や雑誌に載せることが第二ということになっているが、自分は特定メディアに所属していないのでインターネットで情報を発信する。いわばソースコードを公開するようなもので、そうなるとソフトウェアと違って、受け取り手が都合のいい部分だけを切り取って、「この人はこう言っている」と引用したり転用するようなことも起こってくる。ところがそれは全体の主旨、論旨と外れてしまったり、全く反対の意味になることもある。音楽やデザインなどでもそのようなことが起こっているはずだが、インターネット時代の知的成果物に対する著作権はどうあるべきなんだろうか。

これに関連して大阪市立大学の中野秀男教授から、

――学生の論文にインターネットからの引用が多くて手を焼いている。

という発言があった。

――ネットからの引用・転載の場合、テキストに原文のＵＲＬが自動的に埋め込まれるシステムが開発されていて、大学関係者はかなり利用しているという。デジタル・コンテンツについても二次利用を追跡するシステムも開発されているが、原著作者の権利保護には結びついていない。現段階では抑止力として機能している感じがする。

関連して、中国では著作権は守られているか、という議論もあった。これについても上海在住者から面白いコメントがあった。

――最も基本的なことで、日本の方々が理解していないのは、中国の政府は民衆を信用していないということ。従って知的労働の成果物、ソフトウェアであろうとコンテンツであろうと、政府が公認しさえすれば著作権は国が守ってくれる。ただし検閲を受けなければならないが。

### ■中国と日本または中国から見た日本

熊谷　章氏

上海在住のＩＴ関係者から聞くことができたのは、中国の内需が増加しているということだった。「統計的なデータではなく、自分が所属する企業（大学が母体のソフト会社）の状況だが、海外からの受注が減少し、内需が３割ほどに増加している」ということだった。海外からの受注減の要因は、やはり日本の景気低迷が最も大きく、次いで政権交代に伴う公共事業の予算縮減が影響を与えている。

中国国内で需要が高まっているのは物流系のシステムという指摘があった。生産地から消費地に的確・正確にモノを届けることと、需要予測に見合った計画的な生産をすることの２点である、という。上海市の爆発的な人口増と幹線交通網（高速鉄道、高速道路など）の整備を背景に、省・市政府が需給バランスのギャップの解消に乗り出そうとしていることが垣間見えた。

コーディネーターの熊谷氏は自身がかつて上海に本社を置く日本の現地法人の代表だったころの体験を交えて、中国、インド、日本の関係を上海在住のＩＴ関係者としてどうとらえているかを質問した。中国とインドが連携してアジアＩＴ産業を席巻する可能性がどこまであるか、そのとき日本のＩＴ産業はどのように振舞うべきか、というのが質問の主旨であるようだった。

これに対して上海在住者からは、「インドと中国はきわめて現実的な利害関係で結びついているだけで、中国の人は基本的に日本に敬意の念を抱いているのではないか」という回答があった。

――小さな島国で、人口は中国の10分の１にも満たないのに、あれだけの経済力を持っている。その集積には、学ぶところがたいへん多い。情報システムの品質ばかりでなく、サービスの品質も高い。しかしそうはいっても人口の規模や発展の糊しろから見て、近い将来、自分たちが世界に躍り出るのだ、と中国の人は誰もが共通して考えている。日本から見ると、中国に抜かれるという感覚だろうが、われわれからすると、元に戻るだけのことなのだ。

仕事を終えて駆けつけた人も交えての夕食（スケジュールでは「レセプション」）。右隣の卓が写っていないが。

夜景が美しい黄浦江の外灘地区を散策。記念の集合写真をパチリ。ちなみに黄浦江は人工の運河だそうだ。

外灘地区の西洋建築はライトアップされ、夜の10時というのに散策をする人でいっぱいだった。

旧三菱財閥の上海本部ビルは歴史的建造物に指定されたうえ、高級クラブとして使われている。

元に戻るだけ、というのは、どうやら唐・宗の時代のことを指しているらしい。なるほど、その時代、中国はアジアの宗主国的な地位にあって、日本は朝貢して柵封を受ける立場だった。そう言われてしまえば身も蓋もない。日本からの参加者は苦笑するほかなかった。

こうした意見交換を通じて、筆者は「日中ソフトウェア産業は共同・連携による開発と市場開拓を目指す第３段階に入った」ことを理解した。中国ソフト産業は遅かれ早けれ、日本のコストカッター、オフショア先としての役割を終える。日本は中国国内のＩＴ利活用を先導する役割を担い、並行して日本と中国が世界市場に飛躍するために相互補完のパートナー関係を模索するべき、ということだ。

## §４　レセプション＋外灘見物

### ■仕事を終えて駆けつける人もあり

お役所が管理する施設なので、午後５時きっかりに会場から退去しなければならない。自由討議は「あと○分」と時計を気にしながらだったが、上海のＩＴ事情が本音で聞くことができた。また今回、特別参加したロックバンド「頭脳警察」のPANTA氏の発言をきっかけに、インターネット時代の楽曲コンテンツ流通やＩＴによるバーチャールタレント〈初音ミク〉、コンピュータ合成音声技術と３次元画像処理技術を応用したコンサートなどにも話が広がった。

その世界でもオープン・コミュイティや無償ダウンロードのウエイトが高まっており、「規格化された工業製品としての楽曲やタレントを擁し、既存の著作権の概念を振り回して収益を得る時代は終わりを告げつつある」というPANTA氏の指摘は、ソフト業界ばかりでなく、われわれ報道メディアにも通じるものがあった。

レセプションといっても、どこかに会場を取って立食パーティというわけではない。車で10分ほどの中華レストラン（中国ではわざわざ「中華」とはいわない）に移動、車を降りた岸田氏が格安ＤＶＤの露天に立ち寄って何枚か購入する場面もあり、仕事を終えて駆けつける人もありの夕食会が始まった。

このとき聞いたのは、上海の交通カード。ＩＣチップ内蔵で、バス、タクシー、地下鉄、鉄道のすべての公共交通機関で利用できる電子乗車券だ。写真が鮮明ではないのは暗かったから、という言い訳でご容赦いただくとして、上海市内に勤めている人なら、たいていはこのカードを持っているという。個別に定期券を購入する必要もないし、小銭も要らない。日本のSuica、Pasmoと同じだが、上海市全域のすべての交通機関、という点が異なる。バスもタクシーも上海市営なのでできるサービスだ。

### ■夜の10時でも散歩する人がいっぱい

食事のあと、外灘地区を散策した。外灘は「外国人の租界」の意味で、英語で「The BUND」とも呼ばれる。黄浦江をはさんだ向こう岸約１キロにわたって高層ビルとネオン、こちら側は旧租界の西洋建築の夜景という上海隋一の観光スポットだ。ちょうどネオンライトを煌かせた遊覧船が遊弋しているところだった。

黄浦江は人工の運河で、そこから大量の物資が出入りした。軍事力をバックにした米欧列強＋大日本帝国の中華思想に、本家本元の中華思想が圧倒された歴史的遺産である。かつてユニオンジャックが掲げられていた時計台の先端に、今は五星紅旗が翻る。ライトアップされた歴史的建造物の景色は壮大で目を奪われる。「帝国主義が残した搾取の果実ですよね」――ツアー最年長・吉村鐵太郎氏が呟く。

折から上海世博開催中ということもあって、上海市内には国内外から観光客が大挙して押し寄せている。外灘の夜景は見逃せない。夜の10時を回っても歩道には人が溢れ、まるで朝夕のラッシュ時並の混雑――たぶん１万人に近いレベルの数千人が蒸し暑い夜風に吹かれていたに違いない。しかしこれだけの人が集まっているのに物売りの屋台がほとんどないのは、なんとも不思議だった。

気をつけていないとグループからはぐれてしまう。こっちは地理が不案内なので、置いてきぼりになったらタクシーでホテルに戻ることになる。でも写真は撮りたいし、周りの様子も記憶にとどめたい……。近場からやってきた人は地下鉄の駅へ、ホテルに戻る人はぞろぞろと歩く。歩きながらも「最終処分」を謳った家具店（どこでも同じ）や、「一斤10元」と大書した古本屋（１斤は500グラム。古本を重さで売るのだ）を見つけ、中国２日目の夜が終わった。

（以下次号）

# 記者会事務局の移転と新オフィスのご案内

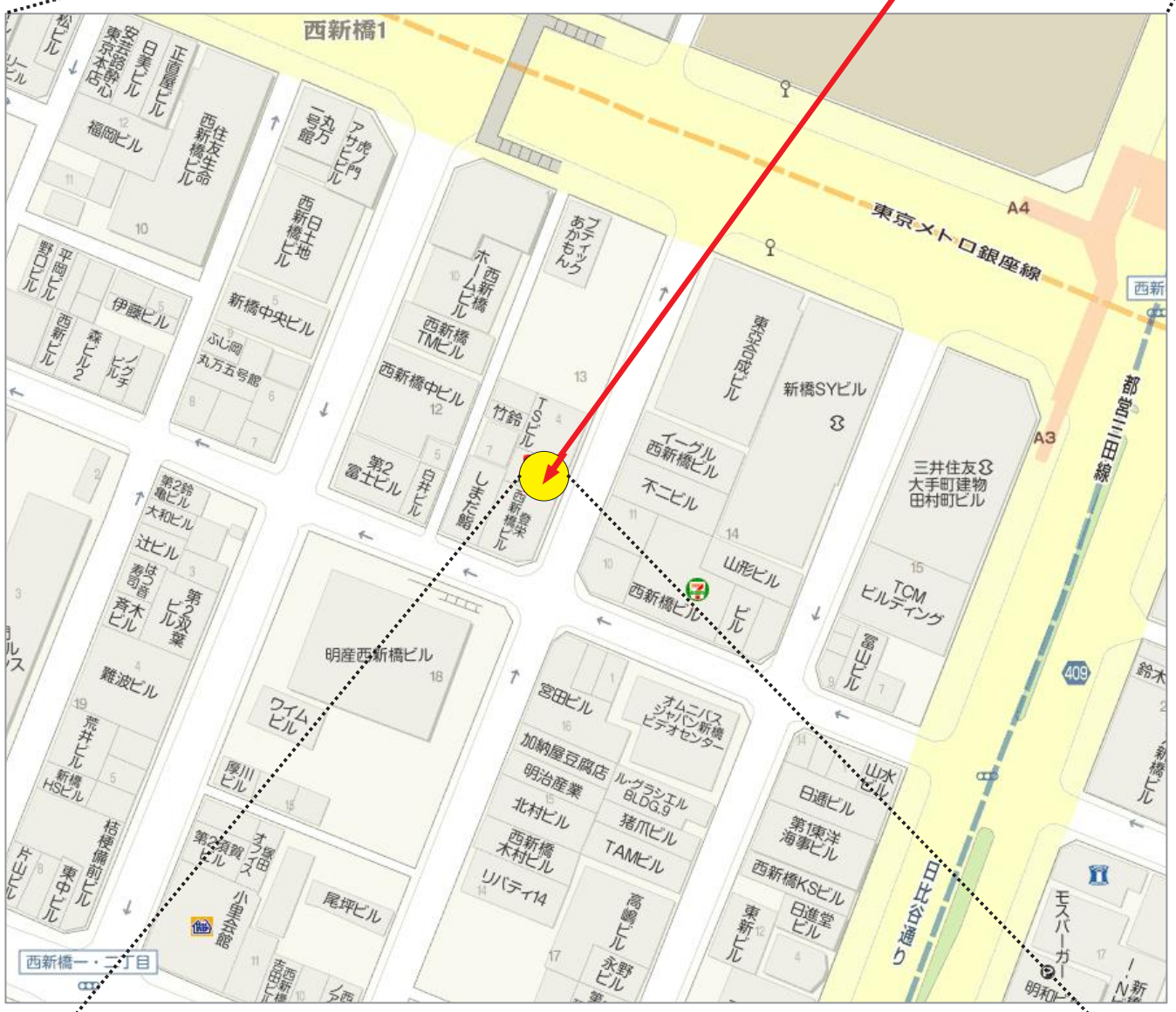
かねてから検討していた事務局の移転が本決まりとなりました。新しいオフィスの住所は、

東京都港区西新橋１－13－５／長井ビル２階

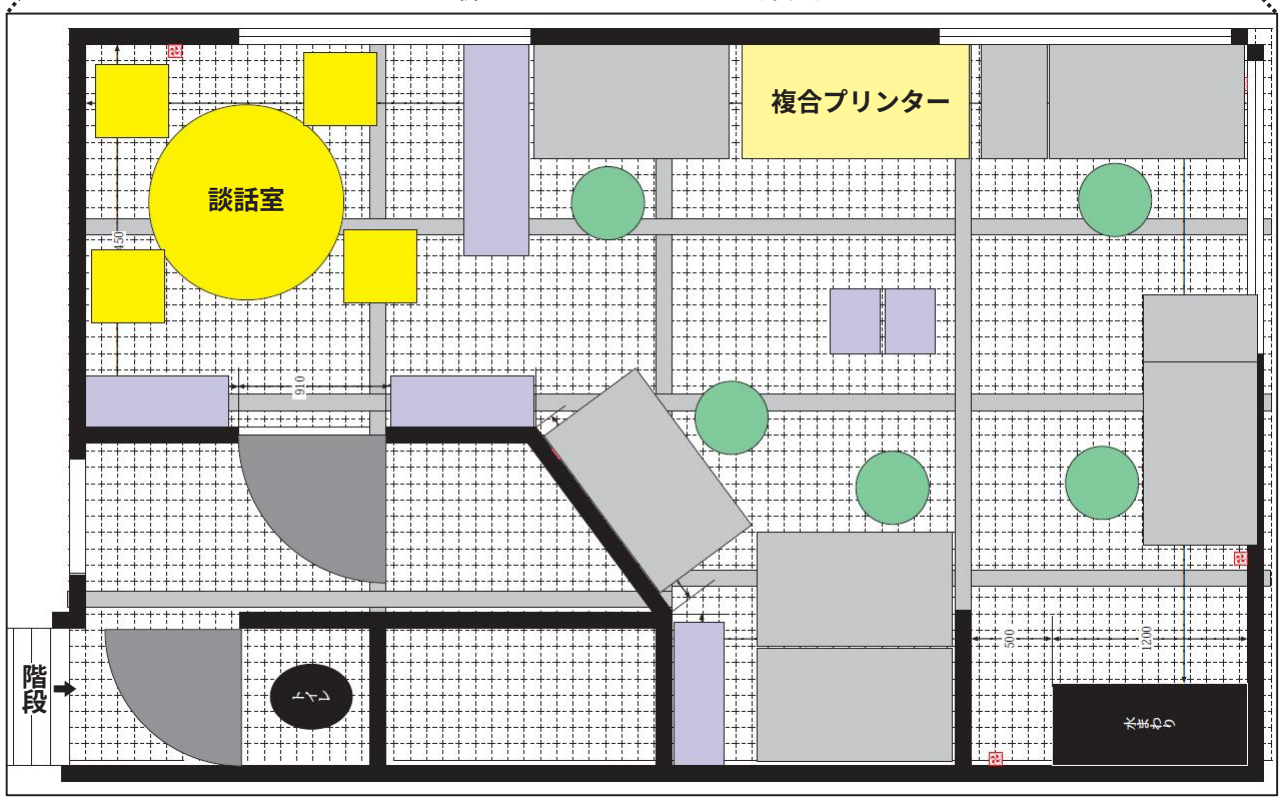
となります。電話／ＦＡＸ番号には変更がありません。

８月24日にビルのオーナーと正式な契約を結びました。９月３日に引越し作業を行い、６日の月曜日から運用を開始いたします。

図に示したように、新しいオフィスはＪＲ新橋駅と現在のオフィスのほぼ中間点に位置します。円は新しいオフィスを中心とする徒歩６分圏。地下鉄の内幸町（都営三田線）が徒歩２分、虎ノ門（銀座線）、霞が関（丸の内線、日比谷線、千代田線）が６～７分、その気になれば日比谷（日比谷線、三田線、千代田線）、ＪＲ有楽町まで歩ける距離です。




新オフィスのレイアウト（予定）




大きな歩道橋を渡った向いが千代田区内幸町、新日本石油の本社がドンと構えています。その向こうが日比谷セントラルビル、日本プレスセンターと続きます。霞が関の経済産業省には、これからは裏門（旧正門）から出入りすることになりますね。

日比谷通りを越えて新橋駅前のＳＬ広場方向に進むと、そこは「おじさんたちのワンダーランド」新橋飲み屋街。大型家電ショップ・ヤマダ電機、ニュー新橋ビルも徒歩５分圏内です。郵便局や銀行（記者会の通常口座はみずほ銀行）、コンビニも間近かにあり、同じビルの１階が「花半」という飲み屋さん、お昼の会合に使えそうなお蕎麦屋さんやコーヒーショップもありますので、立地としては悪くありません。

## 最大キャパは５人

占有面積は実質7.5坪と、現在（階段、エレベーターを含め14.5坪、実質13坪）より大幅に減少します。ただ、ドアの位置が階段を上ったすぐのところですし、トイレが室外ですので、動線がこれまでよりシンプルに、かつ効率的に設定できるようになります。ＩＴ図書館の蔵書はかなりの割合で倉庫に預けることになりますが、結果として談話用の円形テーブル、机６個（うち１個は荷物置き場の棚として使用）、パソコン５台、サーバー１台を設置できる見込みです。同時に仕事ができる最大キャパシティはしたがって５人となります。

机（事務スペース）１か所当り１つのコンセント（受け口２つ）が配置されるため、同時使用の負荷が分散されるのもメリットです。電力消費量が大きい複合プリンターの動作に支障が出ることがありました。これも解消されると期待しています。

最大５人のキャパシティを確保したのは、日本不動産ジャーナリスト会議（REJA）の有志から、「共同オフィスとして利用したい」という申し出を受けていることと、記者会加盟のフリーライターが、REJA有志の方々と同じように自分のオフィスとして使うことを想定しているためです。また記者会として大きな調査案件を受注した場合、複数のスタッフが常時ここで作業をすることになるでしょう。

オフィス移転に伴って発生する経費はおよそ100万円を予定しています。主な用途は以下の通りです。

引越し業者：21万5000円
新オフィス敷金：40万円
　前払い賃料：９月分は月割り
　仲介手数料：10万円
蔵書倉庫代：年間２万5000円
電話回線の敷設・開通：未定
LANの敷設・設定：未定

（確定値ではありません）